

新たな時代を切り拓く “教育”

好奇心あふれる表情で、

キャンパスを縦横無尽に歩き回る

新入生の姿は、大学の春の風物詩。

期待に胸を膨らませた彼らに

長崎大学はどのような教育を行うのでしょうか。

そもそも、大学における教育とは、

どうあるべきものなのでしょうか。

長崎県教育委員会の教育長である寺田隆士氏と

片峰学長に語っていただきました。





長崎大学長 片峰 茂

Katamine Shigeru

1976年長崎大学医学部卒業後、東北大学大学院医学研究科博士課程修了。医学博士。米国国立癌研究所国際研究員、長崎大学医学部教授、2002年より長崎大学医歯薬学総合研究科教授。専門はウイルス学(特にプリオン)。2005年より長崎大学国際連携研究戦略本部長、同大学学長特別補佐、2007年より(独)日本学術振興会学術システム研究センター主任研究員の兼務を経て、2008年より現職。

司会・進行

工学部教授
原田哲夫
(本誌編集長)



はじめに、最近の大学生の印象について伺いたいと思います。

寺田 大学を拠点にボランティアや部活動などで積極的に街中へ出て、活動の場を広げているようです。その点は私たちの学生時代と違ってすばらしいと思っています。

一方、少々どうしたものかなと感じているのは、学生が近況報告に高校の恩師を訪ねて来たとき、かつては、大学でやっている学問や研究について熱く話す人が多かったのですが、いまは本当に少なくなりました。また、私が学生の頃は、「学問や研究を通じて、わが国、あるいは人類に対して何か貢献できるようになるぞ」というような「志」を抱いていましたが、そういうものもあまり感じられませんか。

片峰 それがいまの若者たちの気質なのか、それとも大学の責任なのか、その判断は難しいところではあります。私は多分に大学の責任もあるのではないかと考えています。というのも、入学式のとおり、新入生たちの目は輝いていますが、半年そして1年と経つにつれ、どこか生気のなさを増した学生が増えてくるのです。その原因を大学は分析し、反省すべきは反省

し、改善していく必要があります。おっしゃる通りに大学は、「志」を立てる場所であるべきで、その環境を提供しなければなりません。それは、たいへんな難問ではあるのですが…。



「志」への扉を開く、 学生と教員の出会い

片峰 大学が「志」を立てる場所であるといつことでも、もっとも大きな影響を与えるのが、教員との出会いです。私が学長就任以来、機会あることに言っていること

ですが、「志」と覇気にあふれる学生を育てるためには、まず、教員の「志」が高くなければいけません。たとえば、世界に誇るような研究をするとか、他にはない教育を行うなど、教育者、研究者として高い「志」を持った教員たちを長崎大学に集めていきたい。そういった教員との出会いに触発されて、学生たちが「志」を立てていく。そう、あるべきなのです。

寺田 大学が抱える問題もあるので、しょうが、それ以上に小・中・高校の教育の問題も大きい。私は、いまの日本の若者に対し、「志」の高い人が少ない。品性が低下している。学習意欲と学力が低下している、という3つについて大きな懸念を抱いています。特に、については心の教育と言われていますが、その中心に「志」の教育が必要だと考えています。

「志」への扉を開く、 子どもの「憧れ」を育み、 「志」へつなげる

寺田 私は「憧れ」という言葉がたいへん好きでして、漢字では心を意味する「忄」に、少年少女を意味する「童」と書きまします。つまり、少年少女の心の本質は「憧れ」で、それはまだ見ぬ遙かなるものへの思いあるいは、将来の自分への思いだと私は解釈しています。「こ」で重要なのはその「憧れ」が、やがては「志」へと変わるということなのです。つまり、「憧れ」を育てること

長崎県教育委員会 教育長 寺田 隆士

Terada Takashi

1970年東京大学文学部卒業後、長崎県の高校教員になる。専門科目は倫理、日本史。五島南高校、口加高校を経て、県教育庁教職員課に勤務。その後、諫早高校教頭、県教育庁学校教育課参事および総務課参事、島原高校校長、長崎県教育センター所長、長崎東高校校長を経て、2008年4月から現職。2006年から2年間、長崎大学経営協議会委員も務めている。



が、教育の中心いわば本丸だと思つての
す。

実は「憧れ」を初等・中等教育で育み、
高等教育へつなぐという考えを取り入れた
事業を、長崎県教育委員会では今年
度からスタートさせました。その中でポ
イントになるのが、片峰学長があつた
「出会い」です。具体的には、「志」を持つ
活動している人に会って話を聞く、ある
いは伝記などを通して偉業を成し遂げた
人の生き方に触れる、そういう「出会い
」の場を創っていくことになるでしょう。

また、そのような突出した人物との出
会いはもちろんですが、その前に、子ども
たちの身近にいる親や教員たちが自らの
「憧れ」を積極的に語ることから始めて
いきました。

「大学の先生方にも、ぜひ、ご自身の憧
れ」や「志」をしようばなに学生たちに伝
けてほしいですね。

片峰 そうなんです。教員自身が、そう
いう「憧れ」や「志」を持っていないと学生た
ちには伝えられません。ここはとても大
切なところで、アメリカのオバマ大統領で
はありませんが、やはり「Change」が、ひ
このキーワードだと思つています。

いま、時代は百年に一度の経済不況と
いう見方もあれば、日本では幕末以来の
大変革の時代だという見方もあります。
いずれにしても世界的に大きな変わり
目なのです。まずは、そういう時代の真只

中にあることをきちんと認識しなければ
なりません。日本の社会は、変えることに
対して臆病になっていますが、長崎大学の
教員は勇気を出し、率先してシステムや
ものごとを変えていく。そういう姿勢が
何より、学生たちにいい影響を与えるの
ではないでしょうか。



下村脩先生の偉業は、 学生や教員の財産

片峰 昨年、長崎大学薬学部出身の下
村脩先生が、ノーベル賞を受賞されまし
た。かつて、下村先生がこのキャンパスで日
夜研究に勤しんでおられたことをイメー
ジできることは、教員や学生たちにとって
たいへん大きな財産なのです。ノーベル賞

の存在も雲の上にあつたものが、ぐんと身
近に感じた人もいるでしょう。下村先生
の偉業は、長崎大学の「志」を立てる環境
のひとつとして新たに加わったともいえま
す。

寺田 ええ、後輩たちの「志」は格段に高
まったところでしょう。

片峰 また、視点を変えたところでは、
長崎は幕末、時代を変えようという「志」
に燃えた若者たちが集つた街ですが、この
地で坂本龍馬が新しい日本の姿を描いた
福沢諭吉が学んだ、といったことは、「志」
を立てるためのイメージ的な環境の素地
があるといえます。ぜひ、それも活かして
いきたいと思います。

「人類のため」が、 自分の幸福につながる

寺田 片峰学長は、「人類のために何が
できるかを考えることが、大学のスタン
ド」(本誌25号参照)とおっしゃっていま
したが、私はこの言葉にたいへん感動しま
した。自分にとっての幸福は何かと考えた
とき、結局、他の人の役に立ったという思
いを抱くときが幸福なのですね。つまり、
「人類のため」が、自分の幸福につながる。
それを現実に導くことが最高の教育なの
だろうと思います。私自身も、高校の卒
業生などから記念にひとこと書いてくだ



さいと頼まれると、「人の笑顔を見て喜ぶ習性がある私たち人類は、他の人の幸福に役立つことを自らの幸福とする、そういう遺伝子があるはずだ」と書いているのです。

片峰 確かに、そうですね。それがなかったら、人類はここまで来ていなかったでしょう。他の人の幸福の役に立つことを自らの幸福とする、「その道、方法はいろいろありますね。たとえば、医師や看護師のように直接的に人の役に立つというやり方、また、社会のシステムを変えるアイデアで役に立つ、あるいは、新しい発見や発明で幸せにする」といった道もあります。どの道を選ぶかは、個人の方向性、「志」によって変わります。学生たちが大学に在る間に、その方向をつかみとってくれたら本望です。

「教えて、考えさせる」 教育への転換

片峰 社会に出て必須になる能力はやはり、問題解決能力だと思いますが、それを大学の4年間で養うのはたいへんなことです。やはり、小・中・高・大という流れの中で、時間をかけて養うべきではないでしょうか。

寺田 そうですね。問題解決能力を育てるといっても、まず、子どもがめざす

教育は、子どももの思考力・判断力・表現力・創造力を育てていきたいと思います。そのついでに力を育むときの材料や道具になるのが、「知識」なのですが、今の風潮である「知育偏重」や「知識詰め込み」などへの批判から、「知識」の習得が悪者にされ、「知識」はいらぬから、自分で考えて判断しなさい、表現しなさいという、つまり、「教えないで、考えさせましょ



う」という発想の授業が行われました。しかし、それでは、なかなか子どもたちは伸びず、むしろ、逆効果であったように感じています。

そこで、いま、「教えて、考えさせる」授業への転換を働きかけているところです。この「教えて、考えさせる」というのは、東京大学教育学部の市川伸一氏の言葉なのですが、これが子どもの課題のひとつで

あります。

それと、実は考える力を伸ばす手法と、いっしょには、「実験・観察・調査・研究・発表・討論」という、大学で昔から取り入れられているすばらしい手法があるのです。初等、中等、高等教育のそれぞれの段階において、この手法を指導できるようにする必要があります。

諸学の「カタ」を 伝える教養教育へ

教養教育についてのご意見をお聞かせください。

片峰 教養教育は、問題解決能力や自立心、あるいは社会に出て仕事ができ、とできる人間を育むために必要なわけですが、実は私は、「大学における教養教育とは何だぞっ?」と長年、疑問に思っていました。そして昨年、ようやくその答えとなるようなお話を伺うことができました。

それは、昨年秋季の学長就任に伴い、当時、私が兼務していた日本学術振興会学術システム研究センターの主任研究員を退任するときのことです。私は、副所長の石井紫郎博士のところへ、「あいつに伺いました。ちなみに石井博士は、法学・法システムの大権威で、日本の学術全般に大きな影響を及ぼす論客のひとりです。私は、石井博士に率直に自分の疑問をぶつ



けました。大学で教えるべき教養とは何でしょうか」と。すると、それは「カタ(型)です」という答えが返ってきました。石井博士は、踊りや空手に「カタ」があるように、諸学にも「カタ」があるということです。

ここでいう「カタ」は、スタイルや方法論というよりは、センス、哲学のセンス、文学のセンスなどといった方が近いかもしれません。たとえば、中学や高校までの歴史は知識を教えればいいが、大学では歴史学の「カタ」を教えなければならぬということ。それはつまり、無尽蔵の歴史的事象の中から、記述すべきものを抽出し、分析するためのセンス・手法といったところでしょいか。ほかの分野にももちろん「カタ」があるといえます。なるほど、「カタ」さえ会得すれば、後は、当人の努力でいかようにも教養を深めることができるというものです。

長崎大学の場合、全学教育という教養教育を行っていますね。

片峰 長崎大学は、旧制高校の伝統が流れる独自の成り立ちから、文学部や理学部といった教養教育のコアになる学部がありません。そこで、教養教育は全学の教員が担当して、それぞれの得意の中で全学の学生に教えていく、全学教育を行っています。そろそろ成果について総括し、改善を図る時期にあると考えていま

す。学生たちには、教養の真髄に触れてもらうために、やはり「カタ」に通じた諸学の達人(プロ)に学んでほしい。そのため教員組織をどうするか、いまの私の課題のひとつです。

寺田 私自身は、先生方が総がかりで取り組む全学教育はとてすばらしいシステムだと思っています。小・中学校の教



員も参加して学ばせてもらい、小学校バージョン、中学校バージョンをつくるのもいいかもしれません。

科学の力、新たな知恵で、危機を乗り越える

片峰 いま、世界的な経済危機にあり、また、地球環境の問題など本当にたいへん

な時代に向かっていると思います。

寺田 ええ。そういう意味では私たちは非常に幸せな世代でした。生まれたときは何もなかったけれど、それが当たり前で、ちと不自由だとは思いませんでした。そして、年を追うごとに生活が豊かになる中、科学の力で世の中がどんどんいい方向へ進歩していくのだという思いを抱いて、少年時代を過ごし、そして、高度成長期に青年時代を過ごしました。

いま、科学が引き起こしたいろいろな問題がありますが、結局、それを解決できるのもやはり科学だと、私は強く思います。

片峰 そつですね。人間は引き返せないと思いますし、ならば、この危機的な状況も新たな知恵で解決していくしかありません。そういう意味で、大学などの教育・研究組織や機関の役割は、たいへん大きく、今後どういつ成果を出していくか、あるいは、どういつ人材を輩出していくか、ますます重要性が増していくことでしょう。

専門教育、大学院教育がめざすべきもの

各学部における専門教育、大学院教育はどうかあるべきでしょうか。

片峰 それぞれの専門教育を通して、学

生に何らかの付加価値をきちんと与えて社会へ送り出す、これは基本的なコンセプトです。たとえば長崎大学工学部の学科の卒業生は、こういうものを必ず持つていくというところを、社会や企業にきちんと認知してもらえらるような人材を輩出するということです。そして、専門的な職業人として信頼できる人材、新たにいろいろな創造ができるような人材を育てなければなりません。

また、地域のことだけでなく世界の状況を把握し、その中で、自分の立ち位置や将来的に何ができるかということを、常に問題意識として考えることのできるような人材を育てたいですね。そして、その考えや思いを実現する力も育てる。そのために、先ほどの教養教育にもとづいて、まず、「コミュニケーション能力が必須です。英語力も含めて。そういう力を長崎大学の学生にどう身に付けてもらうか、これは、近々の大きな課題のひとつです。同時に、広い意味での教養も必要です。海外に出たとき、世界の一般的な教養について語れない、日本の文化も語れないでは通用しませんから。

寺田 そのために、私どもの長崎県教育委員会はあります(笑)。1つは国語力による「コミュニケーション能力を付けること。2つ目は数字を使って考える力、理論的な思考力を算数、数学を通じて鍛えていく。数学はおそらく科学の言葉でし

から、いろいろな現象を数理的に処理して考えていくという能力も。3つ目は国際的な視野を育むために、世界史の教育が大切だと思っています。

また、できれば、高校生までのうちに1度、海外を経験させたい。2〜3日でも、また修学旅行でもいいから。外国の地に実際に自分の足で立ち、住人と実際に出会ってみる。そういった経験は、何ごとも国際的に協力して進めていくこれからの時代にとって、たいへん大切なことです。

片峰 人材育成において、繰り返しますが、教員の責任はものすごく大きいのです。一方でいまの大学の教員は、社会から大学内部からさまざまな役割を求められ、とにかく多忙です。少し余裕を持たせ、本来の教育・研究に勤しむ時間を取り戻すようにしていきたい。状況は厳しいですが、いろいろな手を打っていきます。

世の中を変えていく 主体となる人材を育てる

今後の展望について、どうお考えですか？

寺田 私たちは地域の共同体の良さを十分知っている世代です。昔の子どもたちは、親よりも近所の方々に見守られ、しつけられながら育ちました。失ってしまつた地域の共同体を、いまこそ新たに築く必

要があると感じています。そうすれば現在、起きている教育の問題の大部分が解決するのではないかと考えています。私はこれから「隠居さん」と呼ばれる身分になります。かつて、「ご隠居さん」はその地域の精神的な拠りどころでした。団塊世代がこれから、それぞれの地域でその役割を果たしていく必要があるのではないかと、最近考えるようになりましたね。

片峰 私たちはこれまで良くも悪くも世の中に大きな影響を与えてきた世代です。学生の頃は、世の中の価値観も確定していない時代でしたから、我々が社会を変えていけると思つて、学園紛争などもやつたわけですが、後から振り返ると、あの頃の変えていけるといふ思いは錯覚だらけと言えます。若かつた我々の思いとは違つたところで、世の中はきちんと動いていたのです。しかし、今度は錯覚ではなく、本当に何かを変えなければいけない時期が来つたあると感じています。これから私たちの世代は、変えていく主体となる人材を育てなければなりません。これは、本当に果たさなければならぬ重要な役割なのです。

寺田 教育長を学長室にお招きして行われた今回の対談は、2時間にも及び、盛んに意見が交わされました。今回はその一部をご紹介させていただきます。

